

社会科3学年公民的分野 国際問題に関する生徒の意識について ～生徒の小論文を通して～

竹内 誠司 弘前大学教育学部附属中学校

キーワード：国際問題 Thinking Global Act Local 共生社会

1 はじめに（研究の背景と目的）

中学校3年生という発達段階を考えると、照れくささや気後れから、生徒は授業中에서도進んで挙手発表する場面が見られなくなる。自ずと指導者からの指名発表が多くなってしまふ。また3学年の後半となると、受検期を迎え、教科書の掲載内容を覚えることだけに集中し、社会的論題に対して自分の考えを表現する機会も失ってしまう。そこで、「高校受検準備」と「自分の考えを表現する機会」の両方を考え合わせた時、小論文の作成を社会科の時間に設定した。しかし、基礎・基本となる学習内容を踏まえさせた上で論文作成の時間を設定しないと、テレビなどのメディアから伝わってくる言葉（例えば、イラク戦争、北朝鮮、6カ国協議など）しか書けない。大切なことはそれらの社会的事象の原因や背景、そして正確な現状と今後の課題にある。ちなみに公民的分野の4つの目標の内の1つは、世界平和と人類の福祉の増大に触れている。

まず、基礎・基本となる教科書の内容や指導者の自作資料および課題プリントに沿った学習内容を踏まえたうえで、小論文作成の指導に着手した。生徒が世界で起きている出来事にどれだけ関心を持っているのか。また、その背景にある様々な社会的事象をどれだけ正確に捉えているのか。それらを「世界平和と日本人の役割」というテーマの中で、これから何をどうしなければならないのかを考えさせた。

2 研究の方法（実践の概要）

2.1 作文と小論文

受検時の作文の場合、自分の体験を活かして、その体験に関する感想を述べることが多い。例えば出題テーマとしては、「中学校時代の思い出」「ぼくの友達」などである。しかし、小論文の場合は、体験や感想を書く作文とは異なり、自身の意見を筋道立て、はっきり述べることが求められる。また、読み手が納得するような説得力のある文章を書かなければいけない。論じようとしていることについて、賛成と反対の両方の考え方があることを示しつつ、自身の立場をとその理由を明確に示さなければならない。出題テーマも「日本語の乱れ」「インターネット」「少子化」というように社会的事象から出題されることが多くなる。

2.2 小論文作成の指導

- | | |
|------------|---|
| (1) 対象クラス | 3学年5クラスの内、3クラス（C組～E組）
A組～B組は他社会科教師が担当
計106名（欠席を除く） |
| (2) 日時 | 3年C組 平成18年12月13日（水）
3年D組 " 12月14日（木）
3年E組 " 12月14日（木） |
| (3) 指導時間 | 各クラス50分 |
| (4) 小論文の様式 | 原稿用紙横書き ヨコ20文字×20行、枚数 |

は自由

(5) タイトル

「世界平和と日本人の役割」

(6) 指導内容

数ある国際問題の中で、生徒が何を取り上げて、どのような理論を展開していくのかをみるため、あえて指導者側から、話題を限定しなかった。ただし、国際問題を取り上げるだけではなく、自分なりの解決方法を示すように指導した。

3 結果と考察

3. 1 生徒が取上げた国際問題

下記の表1で見られるように、紛争・戦争について触れ、世界の実情と日本のあるべき姿を論じている生徒が多かった。生徒らが小学校4年の頃に起きたアメリカ同時多発テロとその後のアフガニスタン空爆、あるいはイラク戦争が記憶に新しいためであると言える。また、生徒にとって身近な問題から世界を見ようとする姿勢が見られたのが、食糧問題である。「飽食の日本」と「飢餓に悩む最貧国」という図式を対比させ、その現状を述べているものもあった。時事問題では、北朝鮮の核問題と、日本が国際的にとってきた態度である非核三原則にも触れているものもあった。ただしそれぞれの国際問題がお互いに関連性の強いものであるため、ある一定の項目に終始せずに、戦争から難民が生まれ、ストリートチルドレンや子ども兵士が生まれるというような世界の子ども達を取り巻く社会的背景を正確に捉えているものも多かった。

生徒が取上げた国際問題	C組	D組	E組	計
戦争難民	1	0	2	3
紛争・戦争	7	8	12	27
児童労働・ストリートチルドレン	7	6	1	14
南北の経済格差	3	5	7	15
核問題	6	6	5	17
食糧問題	7	4	4	15
地球環境問題	5	8	1	14
日本の領土問題	0	1	0	1
合計	36	38	32	106

表2 生徒が取上げた国際問題

3. 2 外交に関する世論調査報告と生徒が考える日本人のあるべき姿

平成18年10月の世論調査報告(1, 704人の20代以上の男女を対象)の中で、日本は国際社会で、主としてどのような役割を果たすべきか聞いたところ、「地球環境問題などの地球的規模の問題解決への貢献」を挙げた人の割合が45.4%、「人的支援を含んだ、地域紛争の平和的解決に向けた努力や軍縮・不拡散などの国際平和の維持への貢献」を挙げた者の割合が44.0%と高く、以下、「難民・避難民(特に子供、女性)に対する人道的な支援」(26.8%)、「自由・民主主義や人権のような国際的に普遍的な価値を守るための国際努力」(20.0%)などの順となっている。(複数回答で上位4項目)¹⁾

しかし、生徒が論じている日本人のあるべき姿として、下記の表3にあるとおり、具体

的かつ現実的に考え、現状を打開するために、一歩前に進める感覚で解決しようとする姿がある。「すべては急に上手くいかない。」という考えが大半を占めている。そして、日本にしながらにすることができることや、普段の日常生活から少しずつ変えていこうとする態度が見られた。自分が将来、海外に出て何かしようという姿勢ではなく、「みんなで変えていこう。そうでなければ世界は変わらない。」という観点に立っている表れである。もし小論文の課題が「日本人の役割」ではなく、「自分の役割」であったとしても、この観点は変わらないのではないだろうか。

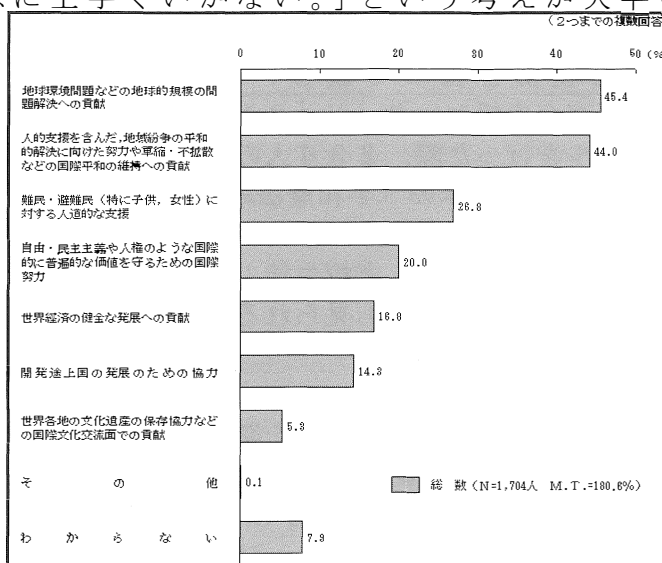


図1 日本の果たすべき役割

国際問題	生徒が考えた解決策
戦争難民	まず戦争の根絶、国連を通じての難民の受け入れ、物資の援助
紛争・戦争	日本国憲法第9条堅持、自衛隊海外派遣反対、アメリカ寄りの外交反対、宗教対立の話し合いでの緩和
児童労働・ストリートチルドレン	最貧国での学校給食を援助 ユニセフを通じての募金活動
南北の経済格差	ODAの援助効率を上げる。工業・農業面での技術協力
核問題	非核三原則を継続して世界に訴える。北朝鮮との対話を継続
食糧問題	日本独自での食糧援助
地球環境問題	ゴミ排出等の3Rの徹底、節制した生活
日本の領土問題	ロシア・中国・韓国との対話を継続

表3 生徒が考えた解決策

3.3 本校生徒と他県生徒との比較

ある生徒は、歴史事象や日本国憲法と関連させて次のような小論文を作成した。

半世紀と少し前、わが国は償いきれぬ大きな過ちを犯した。その際に「代償」として突きつけられた平和憲法が、今となっては自衛隊派遣を難しくさせ、わが国の国際貢献を妨げているとされている。だが、そもそもわが国は何故アメリカの後を追ってイラクへ行かなければならないのだろうか。真似をしたところで、束縛の多い国が出来事事は限られている。ならば、別のルートで国際貢献を果たそうではないか。例えばアメリカがいくら世界平和を唱えても、核を持っていては説得力がない。邪魔者とされる平和憲法があり、核も

なければ武装もしていない（とされる）日本こそ、「世界平和を語る資格のある国家」だと私は思う。矛盾の無い国として、世界平和の真理の追究を進め、力ではなく理論で地球を一つにできる。そんな役割を担って欲しい。

国際連合広報センターが「21世紀の国連と日本の役割」というテーマで、小論文のコンクールを行った際、234人の応募作品があった。その中の最優秀作品から優秀作品の10作品全て、日本の「平和憲法維持と地域紛争の平和的解決の努力」に触れている。²⁾

上記の作品に近い内容のもので、国連＝安全保障理事会というイメージが強いせいでもあると考える。しかし本校生徒の場合、戦争・紛争問題が極端に多くなく、人権問題や環境問題に終始した作品も見られるのが特筆すべきことである。

3. 4 まとめ

基礎・基本となる学習内容を踏まえさせた上で作成させたこともあり、生徒は得た知識を活用しながら、自分なりの考えを述べる事ができている。その中で一番目立った考え方は「地球規模で考えて、身近なことから行動に移す。」という視点である。Thinking Global Act Localという視点が、生徒にも植えつけられている。決してこれは教科書の記述だけではなく、国際理解教育の根底をなす基本理念がマスメディアを通じて、日本人に浸透しつつある表れではないだろうか。以前、前任校で国際理解教育の研究に携わった時、臨教審の答申に目を奪われたことがある。「自分を生かすことは他を生かすこと、自分を知ることは他を知ること、自分を尊重することは他を尊重すること、その逆も真である…」「自他の個性を知り、自他の個性を尊重し、自他の個性を生かすことは、個人、社会、国家間のすべてに通ずる不易の理想である。」と述べていた。

今回、小論文の作成指導を通して、「共生社会」という言葉が見えてきた。それは生徒が世界各国の現状とこれからの日本人がなすべきことをしっかり見据えている証拠だと考える。しかし学校教育全体の中で、「共生」という言葉を正しく認識させ行動化させることが大切であると思う。異文化認識に加えて重要視したいのは、行動化としての共生感覚の獲得である。それは「みんなちがって、みんないい」という世界の獲得である。その意味で国際理解教育が重要視され、人権尊重教育と深く結びつくと考えられる。その人権尊重の教育はいじめ問題が深く根をおろしている日本の学校では欠かすことができない。³⁾ その根底には人権意識の低さがみられる。日本人同士でもみられる異質性の排除意識を国際理解教育を通して再確認し、生徒に深く考えさせることが必要である。

4 今後の課題

- (1) 小テーマ（各国際問題）に絞った小論文作成の指導
- (2) 生徒の意見を反映した社会的価値論争問題の設定と指導の工夫
- (3) 国際理解教育の基本理念の確立と指導の計画化

(参考文献)

- 1) 内閣府大臣官房政府広報室：世論調査報告書平成 18 年 10 月調査
<http://www8.cao.go.jp/survey/h18/h18-gaiko/index.html>
- 2) 国際連合広報センター：小論文コンクール「21 世紀の国連と日本の役割」
<http://www.unic.or.jp/contest/takashimahtm>
- 3) 高階玲治：「中学校・国際理解教育の活動プラン」明治図書 p 2-12 1996